



【解答乱麻】明星大学教授・高橋史朗 児童中心主義の修正を

2008.2.13 12:02

昨年末、「保育所保育指針改定に関する検討会」報告書が出され、同指針案の保育所の役割に「保護者に対する支援」、保育の目標に「自立」という文言が追加された。

また、保育の計画は子供の「発達の連続性」に留意し、「保護者に対する保育に関する指導」が適切に行われるように職員の研修を行うよう求めている。

この改定の背景には、親の教育力の低下という根本問題があり、子供の発達段階に応じて愛着形成と愛着からの分離という2つのかかわりが「自立」の基盤になることを明確に指導する必要がある。

前者によって対人関係能力が、後者によって自己制御能力が育ち、この2つの能力が「人間力」の中核といえる。

日本の伝統的な育児法は母子の愛着を土台として、元服を境に甘えや依存を断ち切って子供の壁になる父性的かかわりを重視するものだった。

第2次大戦後、ルース・ベネディクトは『菊と刀』で日本の伝統的な育児法が集団主義的な人格を育てたと批判し、日本人の育児法は混乱した。

昭和41年に『スポック博士の育児書』が和訳され、児童中心主義の育児法が急速に広がり、高度経済成長とともに核家族化が急速に進行し、祖父母から伝承されてきた子育て文化は断絶した。

日本人は伝統的な育児法への自信を失い、欧米型の合理的育児法へとシフトしたが、欧米はその誤りに気づき、軌道修正を始めた。ブッシュ米大統領とサッチャー英首相は「児童中心主義が教育荒廃の原因」と強く批判し、ミッテラン仏大統領も「児童中心主義による教育が協同的記憶を喪失させ、わが国に損失をもたらした」と指摘した。

わが国において児童中心主義を明確に見直す提言をしたのは平成10年の次代を担う青少年について考える有識者会議で、「地獄への道」は子供たちへの「教育的配慮」という「善意」で敷き詰められている、と厳しく批判した。

そして、親としての成長を促し、母性、父性をはぐくむことが最も重要であるとして、“親としての学習”“親になるための学習”機会の充実が必要であると提言した。

今日の「親学」はこのような戦後の誤った児童中心主義を見直す中で、時代の要請として登場したといえる。

大阪大学の玉井克人准教授によれば、生まれたときから全身の皮膚がむける先天性表皮水疱(ほう)症の子供は、母親が軟膏(なんこう)を塗るという肌の触れ合いのおかげで、例外なく優しく愛情豊かな成熟した心の持ち主であるという。

スキンシップにかかわる遺伝子が情動の発達を促すという科学的根拠に基づく知見は暗夜を照らす一条の光であり、この感動的な事実が愛着の大切さを証明している。

21世紀の教育に求められるのは総合的な「人間力」であり、その基盤となるのは「しっかり抱いて、下に降ろして歩かせる」という日本の子育て文化の伝統である。

誤った児童中心主義を見直し、優しさの母性的かかわりと厳しさの父性的かかわりを取り戻すことが教育再生の最大の課題である。



【プロフィール】高橋史朗

たかはし・しろう 埼玉県教育委員長、NPO法人師範塾理事長、親学会副会長、親学推進協会理事長。著書に『親が育てば子供は育つ』『これで子供は本当に育つのか』。